



こここのところ暑い日が続き、新型コロナウイルス感染症の状況もまだ落ち着かず、皆様におかれましても体調管理に気を付けながら活動されていることと思います。向日が丘相談・支援センターでも感染症対策をとりながら教育相談等を進めているところです。

さて、今回は高校から校内研修の御依頼で、本センターの相談支援チーム 高松 崇 様(NPO 法人 支援機器普及促進協会 理事長)より「発達障害のある生徒における ICT 機器の利用法」についてお話いただきました。「Society5.0」と呼ばれる新たな社会の中で生きていく子ども達に対して、GIGA スクール構想の目的の一つでもある「個別最適な学びの充実」が大切だと教えていただきました。「LD=Learning Disability(学習障害)」ではなく、「Learning Difference(学び方の違い)」と捉え、子ども達一人一人が自分に合った学び方をしていくための一つのツールとして iPad の活用例を御紹介していただきました。



御紹介していただいたアプリの一例

UDブラウザ



弱視の児童生徒向けのデジタル教材。文字のサイズやフォント、配色などを調整して見やすくしたり、音声読み上げ機能で文章を耳から聞いたりすることができます。

Google 翻訳



カメラで文を写すと瞬時に翻訳した文が表示されます。また、音声でも入力でき、様々な外国語へ瞬時に変換してくれます。外国語を日本語にも変換でき、英語の復習等に活用できます。

あみだくじぷらす



子ども達の顔写真がスタート地点に並び、タップした顔が線をたどってゴールまで進みます。順番や担当などを楽しく決めることができます。

計測



iPad のカメラ機能を使い、写っている物の長さや距離等を測ることができます。例えば定規を当てることのできない高さの物を測るという使い方ができます。

他にも、手書きで数式を書いても計算して答えを表示することができるアプリや子ども達の注目を集められる効果音のアプリ、本を読み上げてくれるオーディオブック等を教えていただきました。数え切れないほどのアプリがありますが、アイデア次第で様々な使い方ができます。ICTを活用して、ワクワクしながら夢中で学べる授業を考えたいですね。